265

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業
用地内埋蔵文化財発掘調査概報 (1)

用木古墳群発掘調査概報

1971年3月

岡山県赤磐郡山陽町教育委員会

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業
用地内埋蔵文化財発掘調査概報 (1)

用木古墳群発掘調査概報

目　　次

第 1 章　調査の契機と経過……1

・調査の契機
・調査の経過

第 2 章　予定地内の考古学的環境……2

・周辺地域の考古学的環境
・造成予定地内の埋蔵文化財
・古墳群の特徴

第 3 章　用木古墳群の素描……3

第 4 章　調 査 結 果……4

第 5 章　ま と め……16

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業
用地内埋蔵文化財発掘調査概報 (1)

用木古墳群発掘調査概報

目　　次

第 1 章　調査の契機と経過……1

・調査の契機
・調査の経過

第 2 章　予定地内の考古学的環境……2

・周辺地域の考古学的環境
・造成予定地内の埋蔵文化財
・古墳群の特徴

第 3 章　用木古墳群の素描……3

第 4 章　調 査 結 果……4

第 5 章　ま と め……16

○ 遺跡所在地

岡山県赤磐郡山陽町大字河本地内

○ 調査文化財名

用木古墳群中16基のうち
第１号墳・第２号墳・第３号墳・第４号墳・第５号墳・第８号墳・第９号墳・第10号墳・第11号墳・第12号墳・第13号墳・第14号墳の計12基

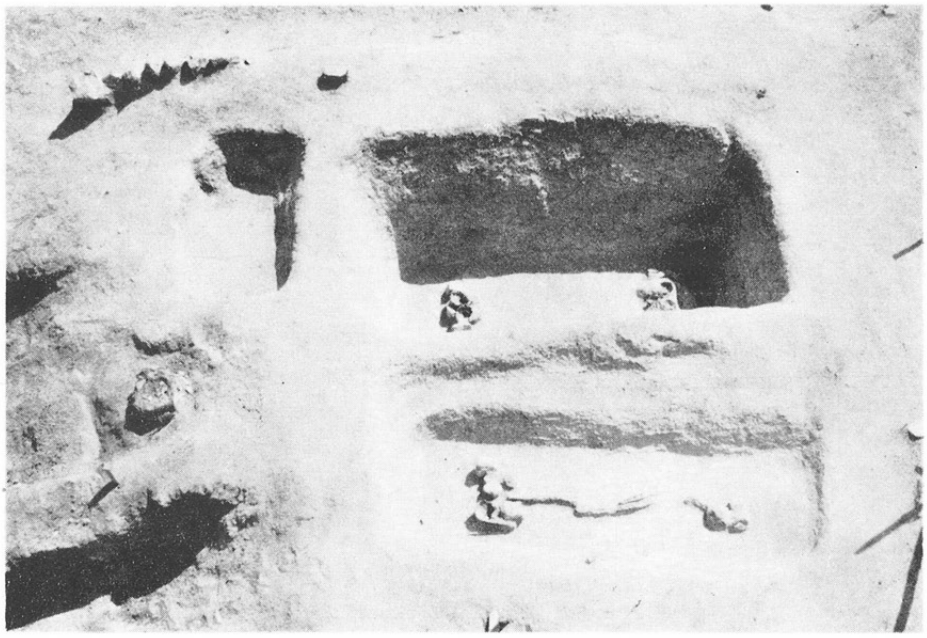
○ 調査期間

昭和44年12月１日～昭和46年１月31日

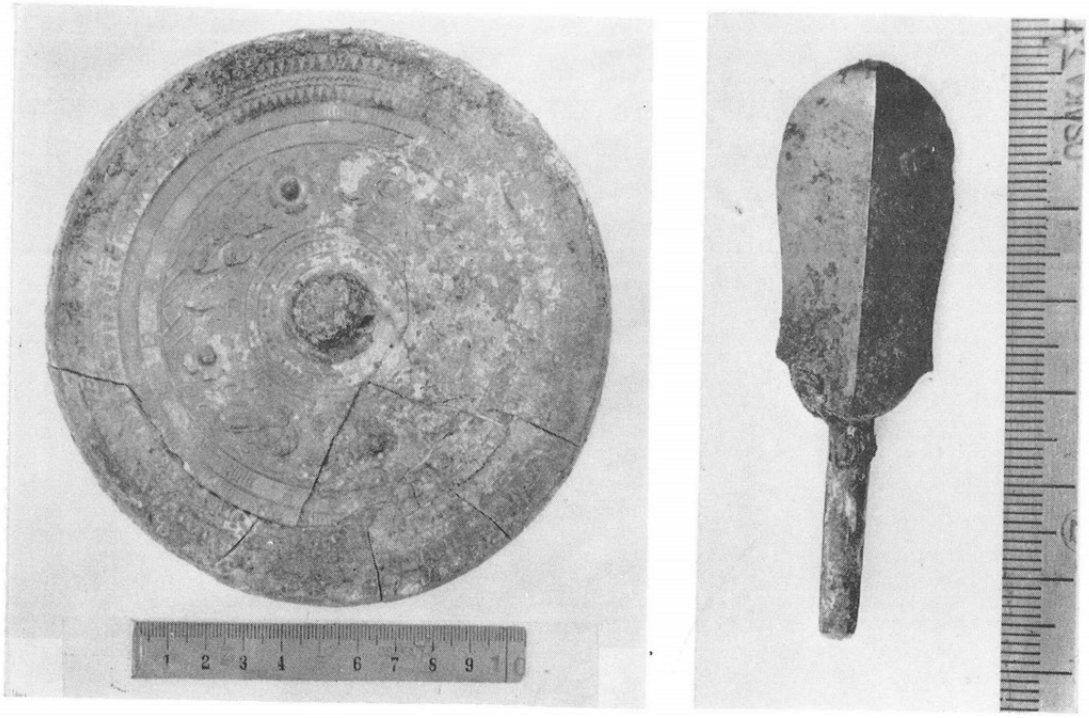
○ 発掘調査担当者

岡山県赤磐郡山陽町上市108
岡山県赤磐郡山陽町教育委員会
山陽団地埋蔵文化財発掘調査団
・調査主任　神原英朗
・調 査 員　則武忠直

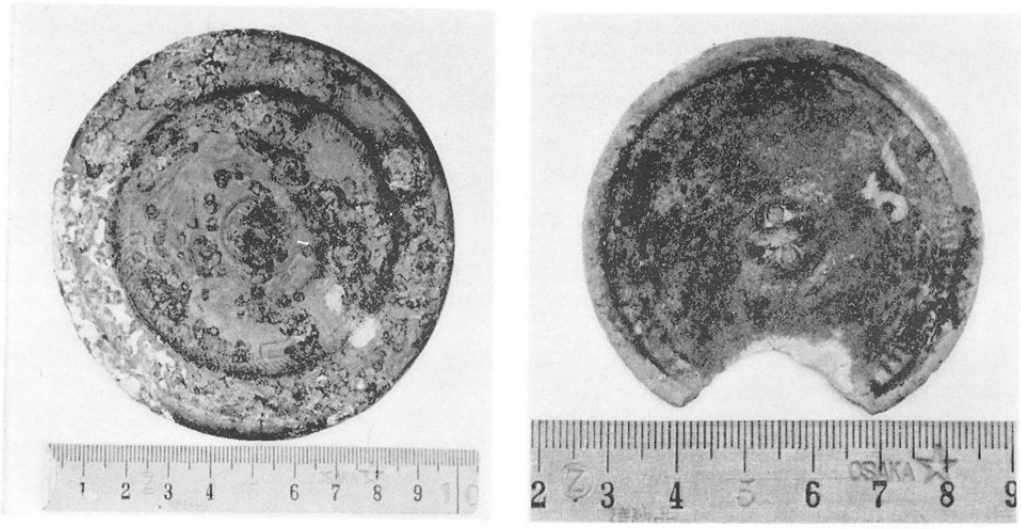
図版1　用木古墳群全景



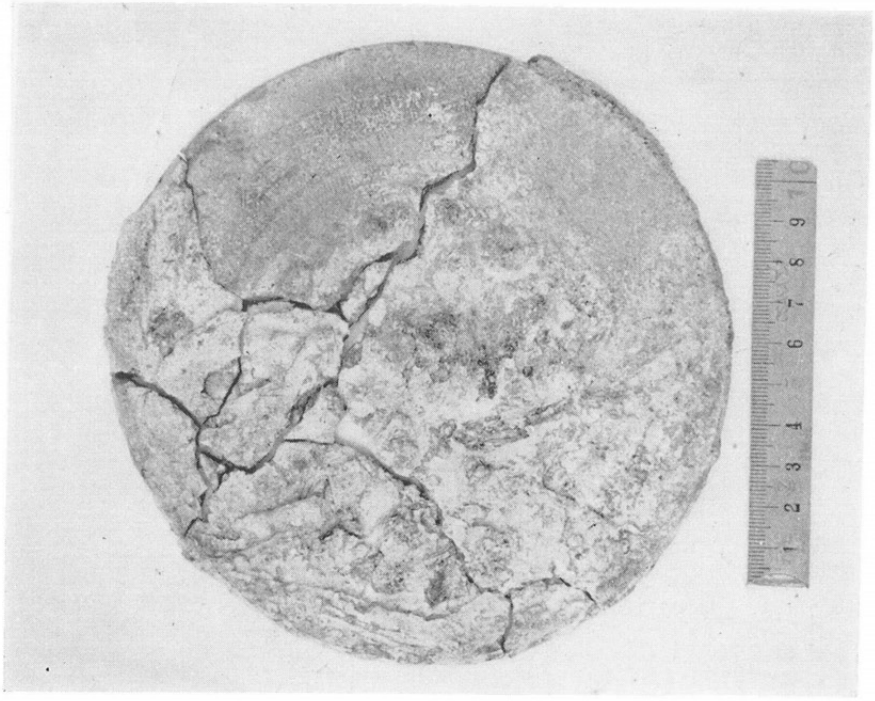
図版2　4号墳北台状部主体出土状況



図版３　１号墳出土鏡（左）・銅鏃（右）



図版４　２号墳出土鏡（左１主体・右３主体）



図版5　3 号 墳 出 土 鏡

図版6　3 号 墳 出 土 鉄 斧 等

第1章　調査の契機と経過

1. 調査の契機

岡山県営山陽新市街地開発事業による，住宅団地の造成工事が，岡山県赤磐郡山陽町で行なわれている。当地は，山陽町の和田，岩田，河本，下市，熊崎，鴨前の6部落にまたがる丘陵地である。東西約900m，南北約1200m，造成面積は100ヘクタールにおよぶ。

当地は，国指定史跡両宮山古墳群の後背地にあたり，東高月遺跡群として，弥生時代の集落址および古墳の所在が注目されていた。しかし，埋蔵文化財の分布調査が十分でなく，造成の計画段階では，僅か数か所の遺跡しか確認されていなかった。土地買収後精密な分布調査の結果，弥生時代を中心とする集落遺跡等7か所，古墳は8支群65基が発見された。

これら発見された埋蔵文化財の取扱いについて，県土木部および県教育委員会を中心とする関係機関協議の結果，熊崎古墳群のように，造成地外に除外したり，団地内自然公園に取り入れて，現状保存に努めた。しかし，住宅団地造成上，技術的に保存の困難な遺跡については，発掘調査による記録保存を行なうこととした。

発掘調査は，原則として集落遺跡を岡山県教育委員会文化課が，古墳等墳墓遺跡を，岡山県の委託を受けて，山陽町教育委員会が担当することとなった。

山陽町教育委員会では調査予定の古墳が30基を越え，調査期間が長期にわたるため，数次に分けて契約をすることとした。

ここに概報として報告する用木古墳群の調査は，昭和44年11月1日から昭和45年11月30日までに行なった，第1次および第2次契約の調査結果である。調査古墳は，用木古墳群16基のうち，12基である。

2. 調査の経過

住宅団地造成予定地内の古墳発掘調査を担当することとなった山陽町では，町教委，町文化財保護委員会を中心に，関係機関代表をもって，調査委員会を組織して，調査を推進することとした。直接発掘調査を担当する調査団は，専従調査員を中心に町内在住者で構成した。

発掘調査は，用木古墳群から着手することとなり，下記のように2回に分けて契約して行なった。

①第1次契約

・調査期間　昭和44年11月1日～昭和45年7月31日

・調査古墳　用木古墳群　第1号墳～第5号墳の5基

②第2次契約

・調査期間　昭和45年5月1日～昭和45年11月30日

・調査古墳　用木古墳群　第8号墳～第14号墳の7基

調査は，実際の発掘にさき立ち，昭和44年11月の１か月は，団地予定地内の埋蔵文化財の分布調査と，調査諸準備に費やした。その結果，当該地の文化財は，はじめの予想をはるかに上まわる，弥生時代集落遺跡・墓地７か所，古墳60基が確認され，弥生・古墳時代を中心とする集落・墓地遺跡群であることが明らかになった。

発掘調査は，昭和44年12月１日，第３号墳から着手した。第４号墳，第１号墳，第２号墳，第５号墳の順序で発掘は進められた。またこれらの発掘調査と併行して，丘陵尾根稜線に総延長約400mにわたってトレンチ作業を行ない，封土が流失して，外観では知ることのできなかった，数基の古墳を発見した。すなわち第９号墳・第10号墳・第13号墳等がそれである。

そのため，第１次契約と併行して，昭和45年５月１日，第２次契約を結び，これらトレンチ調査によって発見した古墳を含めて，第８号墳から第14号墳までの，計７基の調査を行ない，昭和45年10月10日一応の掘り上げを終えた。

用木古墳群の発掘期間中に緊急調査としてヤケ池遺跡の予備調査に出向いたり，また造成工事のペースに追われ，用木古墳群の掘りあげを待ち構えるように，第３次契約により，便木山第10号墳の発掘に取りかかる現状である。したがって，出土遺物の整理，実測図の検討等の諸作業は進んでいない。

用木古墳群発掘調査の報告は，上記理由により，掘りあげ完了時点での調査概報として記述せざるを得なかった。いずれ稿を改めて本報告することを約して，その責としたい。

第２章　予定地内の考古学的環境

1.　周辺の考古学的環境

住宅団地造成予定地の位置する東高月丘陵周辺地域は，岡山県でも有数の遺跡密集地として知られている。丘陵の西方に隣接する水田中には，国指定史跡である，両宮山古墳（192m）をはじめとする大型古墳群が立地する。またそのすぐ西に接しては，備前国分寺，国分尼寺跡が立地している。

当該丘陵の東を南流する砂川と呼ばれる小川の周辺部では遠賀川式土器を伴出する弥生前期の遺跡，その南方約１kmの山麓には縄文晩期の食物貯蔵穴を有し，県史跡に指定されている南方前池遺跡が存在する。

更に当該丘陵から北東西山，鳥取上に連らなる丘陵には，約100基におよぶ群集墳の存在が知られ，特に前方後円墳で巨大な横穴式石室を有する鳥取上高塚も，直線距離にして約3.5kmの地点である。

今回の住宅団地造成予定地は，まさにこうした考古学的遺跡の後背地としての丘陵であり，後述の当該地内発見の遺跡と合せて，考古学上重要な意義を持つ地域と考えられる。

2. 造成予定地内の埋蔵文化財

当該地における埋蔵文化財の所在については，かなりの数の遺跡の分布は，以前から予想はされていた。しかし全山立木が繁り，精密な分布調査が困難なこともあって，十分な踏査が行なわれていない地域でもあった。造成のための土地買収が行なわれ，立木が切り開かれた時点における，踏査によって当初の予想をはるかに上まわる数の遺跡が発見確認された。

すでに遺跡として団地計画を変更して予定地から除外された遺跡については割愛して，現在住宅団地造成予定地内の遺跡について略記する。

住宅団地造成予定地内の遺跡は，分布図（図１）及び遺跡一覧表（表１）に示した如く，弥生式文化時代の遺跡７か所，古墳７支群計60基が確認されている。

弥生式時代の遺跡は，集落址としてかなりの広がりを有するものが，岩田池，門前池周辺の舌状台地が谷水田と接する，なだらかな台状部及び谷頭に立地している。またＹ７遺跡のように，海抜60～90m，冲積地水田との比高約60mの丘陵尾根部の高地に立地するものもある。またＦ７，Ｇ10の如く土壙を中心とした墓地遺跡の存在も知られている。

古墳は，宮山古墳群４基，愛宕山古墳群３基，用木古墳群16基，野山古墳群12基，四辻古墳群９基，便木山古墳群11基，岩田古墳群５基の計60基が確認されている。これらの古墳は，分布図を見ても明らかな如く門前池・中池を含む谷水田を取り囲む丘陵の尾根稜線上に，その殆んどが立地している。

このように発見された遺跡のうち，発掘によって記録保存の運命をたどるものは，弥生式時代遺跡６か所，古墳33基におよぶ。

3. 古墳群の特徴

住宅団地予定地内における埋蔵文化財のうち，当山陽町が調査を担当する古墳について下記のような特徴点があげられる。

(1)発見された60基のうち，すでに盗掘等によって，明らかに破壊されている古墳は９基，他の51基は未掘墳と推定され，保存状況は良好である。

(2)60基のうち57基までが，丘陵尾根稜線上に立地している。

(3)須恵器を伴なうとか，明らかに横穴式古墳と言い切れる古墳は２～３の例外を除いて確認されない。前期的様相を示すものが圧倒的に多数を占めている。

(4)弥生式時代墳墓及び特殊器台をもつ地域である。

第３章　用木古墳群の素描

用木古墳群は，団地造成予定地のほぼ中央部，中池の南から，門前池に向かって，北東に下降しながらのびる，標高92mから50mの高さの丘陵稜線上に立地する。１号墳が最高位92mに立地し，

尾根稜線上に直列状に２号墳，３号墳，４号墳，12号墳，13号墳，５号墳，６号墳，15号墳，16号墳と連なる。更にこの尾根から東に分れて下降する３支脈の尾根が走るが，３号墳南から分岐する尾根に10号墳，９号墳，14号墳，８号墳の４基，４号墳から分岐する尾根に11号墳，６号墳から分岐する尾根に７号墳が所在する（図２）。これら16基のうち６号墳を除く，15基が「記録保存」の運命にある。

発見された用木古墳群16基は，いずれも未掘墳であり，中でも，１号墳（32m），２号墳（22m），３号墳（43m・前方後方墳），４号墳（25m），６号墳（37m前方後円墳）の５基は，いずれも20～40m級の規模を有し，当該地域内発見の７支群中で，主墳を示す系列である。

第4章　調査結果

1.　第１号墳

（立　地）

造成予定丘陵最高部（92m）の山頂部に第２号墳と隣接して立地する。砂川流域の沖積平地を眼下に見わたせ，眺望は極めて広い。

（調査時の状態）

墳頂部に北東から墳中心部に向けて溝状の古い盗掘痕が見受けられた他，墳形はほぼ原況を残し，保存状態は良好である。

（外　形）

いわゆる載頭円錐形円墳である（図３）。径約31m，高さ約4.5m，墳頂平坦部径約９mである。

墳端部に山石による鉢巻状の葺石を有する。部分的には，地山岩盤をそのまま利用している所もあり，またその葺き方及び高位も，立地する丘陵地形に作用されてか一定ではない。特に，２号墳墳端と切り合いとなる部分における葺石は，大きな角礫を石垣状に整然と積みあげて構築されていた。

（埋葬施設）

本古墳の埋葬施設は，墳頂中央部の第１主体の他，計６主体が発見された。しかし，第１主体の他はすべて，墳丘直下地山層に掘り込まれたり，墳外丘陵斜面に構築されている。更に，同地が弥生式土器・石器を伴出するため，そのすべてが本古墳と直接関連を有するものであるかどうか，現段階で知ることができない。

第１主体

墳頂中央部，現地表下約90cmに掘り方上層をもって発見された。長さ4.7m，平均巾0.8mの割り竹形木棺で，長さ6.6m，巾2.6m，深さ0.6mの土壙内におかれていた。主軸は尾根稜線に直交し，ほぼ東西を長軸とする。主体底面及び内法一面に赤色顔料が見出され，木棺のまわりは，精選された地山マサ土でもって埋納していた（第５図）。

副葬品は，柳葉形銅鏃37，直刀１，短冊形鉄斧を含む鉄斧２，鉇１，槍先３，矢筒（痕跡），それに「尚方作竟真大巧，上有仙人不知老，渴飲玉泉飢喰棗」銘の獣帯鏡（径16.5cm）１が発見された（図版３）。

第 2 主 体

墳丘南西の墳端部，崩れ落ちた葺石下方に直接地山を掘り込んで構築した土壙墓である。第１号墳の載った尾根平坦部が南面する斜面となるその肩部に立地している。

主体プランは不規則ではあるが，ほぼ長楕円形を呈し，長軸は尾根稜線と平行してほぼ東西である。長さ220cm，最大巾80cm，地山掘り込みの深さ20cm，現地表より床面までの深さ約40cmを測る。土壙東端部にこぶし大の山石４個を用いた枕石，その周辺部に朱をまいた痕跡を認めた他は，伴出遺物は皆無である。

第 3 主 体

第２主体の西方約4.5mの墳丘外尾根肩に所在する。立地条件は前記第２主体とほぼ同様である。主体プランは隅丸の長方形を呈し，床面にピンポン玉大の円礫を敷いていた。長軸をほぼ南北におき，長さ21.6cm，巾60cm，地山切り込み深さ14.5cm，現地表からの深さ30.8cmを測る。伴出遺物は皆無である。

第 4 主 体

本古墳の構築を調べるために，墳丘西南部を¼カットした際，墳端近くの封土下に地山を切り込んで構築された土壙を発見した。形状は極めて不整形で，平面プランでほぼ三角形を呈しているが，450cm×265cmとかなり大型の土壙である。地山である花崗岩の岩盤を掘り抜いて掘られ，中にいくつかの区画が意識的に作られている。第１号墳の封土盛り土が，切り込まれずにその上方をおおっていることから，この土壙は明らかに第１号墳築成に先行する。発掘による伴出遺物は，埋土中に遊離して検出された弥生後期の土器片の他は認められない。

第 5 主 体

墳丘東端部葺石下に第５主体がある。地山層を切り込んで構築した不整形な土壙で，中に葺石が崩れ落ちていた。長さ340cm，巾188cm，深さ5.9cmを測る。伴出遺物は，弥生後期土器片とサヌカイト細片を若干見出したのみである。

第 6 主 体

第１号墳西南方約30m，尾根平坦部からややくだった南面する傾斜面から，土師器合せ口甕棺が発見された。石室等の施設はなく，直接土中に埋納されている。

（墳丘の築成）

本古墳の築成は，丘陵の自然地形をかなり利用している（図４）。丘陵頂の高まりの中央部を削平整地し，その削平面より下方および，それと同高の尾根部は，切り込んで落としている。また削平整地面上には，それを基盤に約2.2mの土盛りを行なっている。中心主体である第１主体は，こうした築成の過程の中で作られている。すなわち，盛り土を約３分の２盛った時点で，土壙を掘りおろし，割竹形木棺を安置し，まわりを有機質を含まない地山マサ土で埋めている。そして最

後に上方に化粧土を約90cm盛りあげ完成させている。

（その他の遺構・遺物）

本古墳の発掘の過程で，墳丘盛り土中から，多数の弥生式時代の土器片および石器が見出され，弥生式文化時代の遺構と複合するのでは？との考えが強かった。

墳丘を4分の1カットした結果，古墳築成に先き立つ，地山削平面部に弥生時代遺物包含層が発見され，同時にその包含層下方に地山を掘り込んで作られた，竪穴住居址，およびその周辺部から柱穴痕らしい痕跡数個を検出した。住居址は，ちょうど墳丘下に存在し，全面発掘はできなかったため，その正確な数値は示し得ないが，径約6m前後の円形のものである。出土遺物は弥生時代中期末から後期におよぶ土器片，64個にのぼる打製石鏃，多量のサヌカイト石屑，石槍1，石キリ2，蛤刃石斧1，石包丁1などである。

石鏃・石屑は特に住居址内に集中して検出され，ちなみに床面において80cm四方を区切って採集したところ，実に957片におよんだ。

（註・当弥生遺構の調査は，岡山県文化課の手によって，継続調査の予定である。）

（古墳の時期）

本古墳の築造された年代および，各主体間の関連等については，前述もした如く，弥生時代の遺構と複合しているため，明確にすることはできない。立地および第1主体の出土遺物と構造等から推して，第1主体を中心主体とする本古墳の築成は前期前半とするのが妥当であろう。

2. 第2号墳

（立　地）

第1号墳の北に相接して立地する。平坦に伸びてきた丘陵尾根が，傾斜面をみせて下降しようとする肩部に築成されている。

（外　形）

径約22mの円墳と推定されるが，墳丘盛り土はほとんどなく，地山を整形したものである（図3）。したがって，現在の墳表面は直接地山層である。隣接する1号墳の封土の遺存状況から推して築成当初から盛り土をもたない古墳と考えられ，原地形は，第1号墳より高位に立地する。葺石，ハニワ等の外部施設は認められず，また墳端を画する施設も定かでない。

（埋葬施設）

埋葬施設は，墳丘中に3主体，南東墳裾部に1，この古墳から北にのびる尾根上に土壙墓2，甕棺墓3の計9主体が確認された。

第1主体

墳丘中央部に直接掘り込まれた内部主体である。長さ370cm，巾172cm，主体床面までの現存深約90cmの土壙内に，平底組み合せの箱形木棺がおかれたと推定され，中には石が意識的におかれていた。棺は土壙床面の朱の広がりおよび，棺側に埋められたマサ土の痕跡から推定して，外法で，長

さ259cm，巾84cm，棺側高32cmを測る。また棺材側板厚は9～12cm程度と推定される。長側板が長く，小口板をその間に立てている。これらの棺は，尾根稜線に直交し，長軸は1号墳のそれと同じく，ほぼ東西に置いている。

副葬品は径9.7cmの方格規矩鏡1面のみである（図版4）。

第 2 主 体

第1主体の南西，墳斜面にかけて，地山の岩盤を直接切り込んで第2主体が築成されている。形状は不整形な土壙であるが，伴出遺物がないため，時期は不明である。長さ351cm，最大巾165cm，現表土よりの深さ55cmを測る。

第 3 主 体

南東墳裾部から，第1号墳北東墳裾部にかけて，長方形に地山を切り込んで築成された土壙である。1号墳の葺石がこの土壙掘り方上方に重なって構築されていることから，1号墳に先行するものと推定される。長さ420cm，平均巾207cm，深さ57cmと大型であり，中にいくつかの間じきりらしき痕跡も認められ，複数埋葬の可能性もある。副葬品として，径5.5cmの斜行櫛歯文帯を有する内行花紋鏡1面を出土している。

第 4 主 体

古墳の北部墳裾部の，地山を切りこんだ土壙内に甕棺を置いている。弥生後期の棺である。伴出遺物は認められない。

第 5 主 体

第4主体と同じく，墳裾部に位置する隅丸方形の土壙である。流土が著しく床面は浅くなっている。長さ227cm，巾123cmを測る。副葬遺物として鉄器小片1点が発見された。

第 6 主 体

2号墳から北にのびた尾根上に立地する土器棺である。身部は土器片を箱形に組み合せて作り，それに大形土器を半裁して蓋とした特殊の構築である。その土器棺を中心として，クローバ形に3つの小掘りこみが相接して存在することから，或いは複数埋葬の可能性もある。

第 7 主 体

第6主体の南西斜面に作られた土壙である。掘り方プランは40cm×30cmを測り，その中に土器片が存在することから甕棺を内部主体としていたものと推定される。

第 8 主 体

第6主体の更に北方，かなりの距離をおいた丘陵突端部に立地する土壙である。流土が著しく，かろうじて床面を探知し得た程度の保存状況であるが，床面からガラス小玉1点を検出した。掘り方プランで127cm×90cmを測る。

第 9 主 体

墳丘東斜面，第3主体の北に接する形で，築成された土壙である。形状は不整形である。現況掘り方プランで189cm×99cmの規模をもつ。

（古墳の時期）

２号墳は前述した如く，年代決定の決め手となる副葬遺物が少ない。また中心主体と他の主体との関連についても，１号墳の場合と同様明確にできなかった。構築に際しての地山の切り方から推して，１号墳より先行すると推定される。土器棺等が或いは，２号墳中心主体と併存するものとの可能性もありうることを指摘するにとどめる。

3. 第３号墳

（立　地）

第１号墳を山頂として，ゆるやかな下降を示しながら，北東にのびた丘陵尾根の，標高約70ｍの地点に立地する。４号墳と相接して築造され，第２号墳との距離は65ｍである。この地は用木古墳群の中央部を占め，眺望視野も最も開けている。

（外　形）

本古墳は，長径42ｍの前方後方墳である。後方部長26ｍ，前方部長16ｍ，前方部前面巾８ｍ，後方部高約５ｍ（南から），後方部頂と前方部頂との比高約２ｍである。後方部に比較して前方部は細く低い（図６・７）。

墳丘は丘陵の自然地形を利用している。尾根稜線にあたる，前方部前面および後方部墳端部は，溝状に深く掘りさげ，墳丘をより高く見せかけると同時にその幅員を拡げさせている。盛り土は少なく，後方部頂に約１ｍの盛りあげがあるのみで，他はほとんど地山を削り，整形して造り出している。

（外部施設）

墳裾部に巾1.5～２ｍ巾の鉢巻状の葺石を有する。石材は付近の山塊に産する児頭大の花崗岩の山石である。地山を掘り込んだ尾根部では，ほぼ原状を保っているが，側方部では，急斜面に臨むためか大きな乱れと流失をみせている。また削平により地山岩盤の露頭している部分では葺石を省略した形跡も見受けられる。

葺石の他は，ハニワの囲繞等の外部施設は認められない。内部主体土壙直上部および葺石の間に，かなりの量の，土師器片が検出され，その中に出雲松本１号墳出土と同巧のつづみ型器台片が含まれていることが注目された。

（埋葬施設）

本古墳の内部主体は計３主体である。後方部墳頂中央に１，南東墳裾部に２主体がおかれていた。

第１主体

第１主体は，大きな土壙中に平底の木棺をおいた，粘土槨である。後方部墳頂のほぼ中央に，墳主軸と直交して築成されている。

現墳頂下約１ｍに，削平された地山上層面があるが，主体土壙はこの地山を切りこんで掘られている。長さ570㎝，巾230㎝，深さ90㎝の隅丸長方形の土壙の中央に，長さ470㎝，巾50㎝，高さ約

27cmの木棺を安置し，側面および掘り方壁面を青白色の粘土で固めている。棺底及び棺直上部には粘土を用いていない。粘土槨断面は三角形を呈し，3回に分けて構築したことが判明した（図8）。

調査時粘土の崩れが著しく，主体構造の検出が難かしかったが，床面の朱のひろがりおよび，副葬遺物の出土状況から主体床面は長方形の平面である。床面南東部に山石による枕石1対がおかれている。

副葬品は，主体床面北西隅に鉄斧3（内1は短冊形），そのやや中央寄りから，仿製波文帯四獣鏡（径15cm）1がそれぞれ織布に包んだ状態でおかれている。また東南部枕石近くから鉇1が発見された。鉄斧はいずれも柄をはずした形で埋納されたらしく重なり合って検出したが，それぞれ用途を異にするものである（図版5・6）。

副葬品ではないが，棺材と推定される木質が銅鏡の直上及び直下に遺存していた。このほか第1主体直上および掘り方上面レベルから土師器高坏，つづみ形小器台片等が出土している。

第 2 主 体

後方部の南東墳裾部に，地山を削平整形した造り出し状のテラスがあるが，第2主体はそのほぼ中央に位置している。地山を掘り込んで作られた土壙である。長さ370cm，巾179cm，深さ99cmで長方形に整然と掘られている。床面はほぼ水平で両端に各1対の枕石を検出した。枕石間の距離170cmを測る。このことから本主体は複数埋葬の可能性もある。

副葬品として。鉄斧1，刀子1，鉄鏃2を含む小鉄器片が計8点出土した。いずれも銹化が著しく，床面および土壙埋土中よりの発見である。

なお本主体の位置する造り出し状部は，現墳頂との比高5.7m，葺石末端よりもかなり低く，いわゆる墳外とみなされるところに所在し，あるいは3号墳とは切り離れた，別個の独立墳の可能性をもっている。しかし，見た目では明らかに3号墳の一部としての形状をもち，同時性を示しているので，ここでは同一墳としてとりあつかった。

第 3 主 体

第2主体の南西約10m，前方部とのくびれ部付近の墳裾に位置している。葺石下端に地山を掘り込んだ土壙である。掘り方プランは不整形ではあるが長楕円形，床面も前2主体のような平面ではない。枕石は1対おかれていたが，副葬遺物は認められない。主体の大きさは，長さ194cm，巾73cm，深さ49cmである。

（時　期）

伴出した土師器片の検討が不十分で，本古墳の年代を明確には規定できないが，立地，外形，主体構造，副葬遺物等，特に第1主体直上の土器群から，前期前半（「日本の考古学」時代区分による）の古墳としての特徴を示している。

4. 第 4 号 墳

（立　地）

第3号墳と相接してその北東に立地する。第3号墳と接する部分においては，墳端を切りあって

いる。

（外　形）

第４号墳の外形は，１辺約25cmの方形を呈するが，第２号墳と同じく墳丘盛り土をもたず，葺石，ハニワ等の墳域を画する施設もないため判然としない。

墳丘の築成は，自然地形をそのまま利用し，整形しただけのもので，現表土層はすべて直接地山である。

（埋葬施設）

本古墳の埋葬施設は，土壙14，甕棺１の計15主体がつくられている。すなわち墳頂部に３主体，北側墳端から東にかけて，鉢巻状に直列に連らなる５主体。北側墳外の尾根上に土壙６主体，合口甕棺１主体の遺構がそれである。

第 1 主 体

墳頂中央部に第２主体と東西に平行に並んでつくられた土壙で，墳丘長軸と直交する。

掘り方プランは隅丸長方形を示し，長さ363cm，巾157cm，深さ108cmを測る。床面はほぼ水平に掘られ，枕石２対が検出された。副葬品は，土壙埋土中より数片の遊離した土師片の他はなにも認められなかった。

第 2 主 体

第１主体の東につくられた同巧の土壙である。床面に枕石１対の他鉄器片１を副葬していた。長さ306cm，巾118cm，深さ75cmを測る。

第 3 主 体

墳丘北部の墳端にあたる地点につくられた，長さ565cm，巾85cm，深さ約15cmの溝状遺構である。東端部には約120cmの長さに列石がみられ，面は墳頂に向けて揃えられている。溝状遺構の掘り方内には，丹塗り土器片及びつづみ型器台片を含む10数片の土器が見出された。現段階では，４号墳の墳域を画するためにめぐらせた溝か，あるいは内部主体かは不明であるが，これと並ぶ土壙との関連において，一応内部主体として扱かった。

第 4 主 体

第３主体として扱かった溝状遺構の北側墳外の丘陵尾根が，削平されてテラス状を呈しているが，ここに第４主体～第７主体の土壙と甕棺１が位置する。第４主体は，第３主体に最も近くにつくられている（図版２）。

掘り方プランは長方形で長さ326cm，巾167cm，深さ103cmを測る。長軸は，立地する支脈尾根と直交し，ほぼ東西である。土壙壁面及び床共に整然と掘られ，床面両小口部に夫々２対計４対の枕石があり，風化が著しいが，頭骸４個体が夫々の枕石に載っていた。枕石間の距離は165cmである。埋葬時差は明確ではないが，感じとして，同時埋葬の可能性が強い。

副葬品は，鉄製槍先１，刀子１，白色管玉１の３点が発見された。

第 5 主 体

第４主体の北側に平行に，相接して位置する。長方形を呈し，長さ289cm，巾114cm，深さ27cmを

測る。床面東小口部に枕石が2対，西小口部に1対の3組をおき，それぞれの枕石上に頭骸骨が遺存している。枕石間の距離は170cmを測る。そのうちの1体は肩・腕・脚部の遺骨もかなり明瞭に検出することができた。

副葬品は槍先2，刀子1，ガラス玉2が発見された。

第 6 主 体

第3主体の西に直列状に並んで位置する。楕円形のプランをもち，長さ140cm，巾79cm，深さ20cmの小型な土壙である。枕石1対を検出した他は副葬遺物は認められない。

第 7 主 体

第4主体の東に接して位置する。隅丸長方形のプランをもち，長さ141cm，巾87cm，深さ42cmを測る。副葬品，枕石共に認められない。

第 8 主 体

第3主体の東墳端部に鉢巻状に連らなる主体のうち，最も第3主体に近いものである。掘り方プラン，床面共不整形である。長さ234cm，中央巾40cm，深さ32cmを測る。枕石，遺物共に認められない。

第 9 主 体

第8主体に接して作られた土壙である。墳丘斜面の傾斜が急で，下方の壁面は流失しているが，床面は水平を保つ。長さ261cm，巾89cm，平均23cmを測る。枕石，副葬品は共に認められない。

第 10 主 体

第9主体に接してつくられ，第9主体とほぼ同巧同大のものである。長さ248cm，巾97cm，深さ18cmを測る。枕石および副葬品は共に認められない。

第 11 主 体

第4主体，第5主体等の載っているテラスの下方（北）に一段降って，尾根上に小テラスが認められるが，そこに第11主体～13主体が立地する。

第11主体はその中では最も上位に立地し第5主体との距離は約7m弱である。掘り方プランは，長楕円形で長さ260cm，巾115cm，深さ27cmを測る。枕石1対の上に頭骸が遺存し，朱のひろがりも見受けられる。頭骸付近から，マガ玉2，管玉8，小玉2の計12個の玉を発見した。

第 12 主 体

第11主体の北に接して立地する。第11主体とほぼ同巧同大である。掘り方プランは隅丸長方形で長さ267cm，巾128cm，深さ16cmを測る。枕石1対の他は副葬品は認められない。

第 13 主 体

第11主体の東，尾根斜面に立地する。土壙掘り方上に不規則に山石が散乱しており，或は配石墓的なものかとも考えたが，判然としなかった。土壙プランは床面共に不整形である。長さ190cm，巾90cm，深さ約35cmを測る。枕石，副葬品は共に認められない。

第 14 主 体

墳頂第1主体の北面，墳頂肩から斜面にかけて立地する。二重掘り方を有し，或は2主体複合の

可能性もある。隅丸長方形で長さ133cm，巾93cm，深さ42cmを測る。枕石，副葬品は共に認められない。

第 15 主 体

第5主体の東，第7主体の北にあたる所に立地する合口甕棺である。壺に鉢型の土器をかぶせた形で発見された。まだ接合ができないので，計測値は示し得ないが，酒津式土器とほぼ併行する時期のものと推定される。

（時　期）

第4号墳の年代は，第3号墳と接する墳端部で，第3号墳構築のためにその末端を切られていることから，第3号墳に先行する。また，土壙掘り方直上から伴出する土器及び墳丘築成，主体構造等から推して前期前半のものと推定される。

5. 第 5 号 墳

（立　地）

第4号墳から，第6号墳に向けて，巾狭な馬背尾根となっているが，第5号墳はほぼその中間点の稜線上に立地している。

（外　形）

本古墳は，約11m×14.5m，高さ約1.2mの長方形の古墳である。地山自然地形を利用した築成で，尾根稜線上にあたる東西の墳端部は，溝状に掘りさげ，尾根から区切り，角礫の葺石をおいている。墳丘盛り土は，現墳頂で約60cmの高さを測る（図9）。

外部施設は，前記東西の墳裾部にのみ葺石を葺いている他は，ハニワの囲繞等は認められない。墳頂部および東西の葺石間に一括土師器片がおかれていた。

（内部主体）

墳頂部のほぼ中央に，墳丘長軸に平行して2基の埋葬施設がおかれ，更に東墳端葺石下方に地山に切り込んだ土壙1の計3主体がある。

第 1 主 体

墳頂部に並列する主体のうちの1基で，北側に位置する。盛土中にベースをおくため土壙切り込みの線等の確認はできなかった。

現墳頂から約25m掘りさげたところで朱のひろがりを検出した。山石による枕石1対および玉類や鉄器が同一平面上に出土することから，主体と決定した。床面の上下土層共，同質であるため，あるいは盛り土作業の過程で埋納した木棺直葬ではないかと思われる。

床面プランの範囲も判然としないが，長さ約235cm，巾85cmの長方形を示す。副葬品は，剣（或は槍先）1，ガラス製マガ玉1，ガラス小玉6である。

第 2 主 体

第1主体と並んでその南に位置する。埋葬形態は第1主体と同巧同大である。床面に枕石1対がおかれ，その周辺部から，ガラス製マガ玉1，管玉1，ガラス小玉19，鉄器小片1が発見された。

床面プランで長さ235cm，巾78cmを測る。

第 3 主 体

東墳裾部，葺石列の南端に，直接地山に掘り込んだ土壙である。隅丸長方形を呈し，床面も平坦とはいえない。長さ185cm，巾61cm，現表土よりの深さ40cmを測る。枕石，副葬品は共に認められない。

（時　期）

副葬遺物に年代決定の決め手となるものが少ないため，明確にできないが，伴出する土師器片から推して，前述の4基の古墳より新しいものである。

6. 第 8 号 墳

（立　地）

第2号墳と第3号墳の中間付近，標高72mのあたりから，北方に分岐してのびる小支脈があるが，本古墳は，その尾根突端部，標高62mに立地する。眼下に中池を含む谷水田を望み，その比高は約30mである。

（外　形）

径約14m，高さ2.5mの円墳である。丘陵尾根上方の墳端部は，周湟状に切り込まれ，墳域は明瞭であるが，他の部分については，流土のため，判然としない（図10）。葺石及びハニワ等の外部施設は共に認められない。

（埋葬施設）

埋葬施設は，墳頂中央部に1主体，北と西の墳端部に各2主体，東南墳外斜面に1主体の計6主体を確認した。

第 1 主 体

墳頂中央部に尾根主軸に直交して位置する。墳丘盛土中に粘土質の床面を有する直葬である。長さ419cm，巾118cmの長楕円形のプランを示す。1対の枕石および朱の存在から主体床面が確認できる程度である。粘土床東端，棺外と考えられる所に，内湾する鉄鎌1，鉄斧1を含む鉄器が7点一括して副葬されていたが銹化が著しく，器形は判然としないものが多い。

第 2 主 体

墳丘西部墳端部に地山を掘りこんだ土壙である。掘り方プランの出土状況では，長さ約450cm，巾約90cmの長大な土壙とみえたが，発掘の結果，2つの主体が直列状に並んでいることがわかった。261cm×82cm，181cm×97cmを測り，それぞれ長楕円形のプランを有する。副葬品はない。

第 3 主 体

墳丘北部墳端部につくられた土壙である。第2主体と同巧のもので，やはり2主体からなっている。315cm×189cm，103cm×37cmを測る。副葬品はない。

第 4 主 体

南東部墳外斜面に地山に掘りこまれた土壙である。T字状のプランを示し，床面と推される水平

面は切り合った形で２段となっている。浅い床面を有する部分は165cm×70cm，深い方は235cm×60cmを測る。深い土壙には，かなり大きな石材が１個落ちこむ形で検出された。墳端部から約10mも墳外に所在し，或は８号墳には伴なわないものかも知れないが，一応８号墳に含めて記載する。

（時　期）

鉄鎌及び伴出土師片から５世紀後半と現段階では比定される。

7.　第９号墳

第９号墳が立地する丘陵支脈の尾根部全体にわたって，その他の遺構検出のためのトレンチを設営し発掘した。その結果，本支脈稜線上には，封土が流失してしまって，表面調査では検出できなかったが，土壙墓を内部主体とする３基の古墳が存在することがわかった。北から第14号墳，第９号墳，第10号墳がそれである。

第９号墳は極めて巾狭な馬背尾根に築成されており，現況では封土の高まりは殆んど有しない。したがって墳形，規模は不明である。推定径６m前後の低平な小古墳であると考えられる。

内部主体は尾根に直交して，相接して２主体である。いずれも地山を切り込んで掘られた土壙墓である。第１主体は長方形のプランを有し，長さ364cm，巾155cm，深さ54cmで枕石および副葬品は共にない。第２主体は，長さ256cm，巾133cm，深さ65cmの長方形の土壙であるが，床面には円礫が全面に敷かれていた。遺体１個体分が遺存し，ガラス玉１および小鉄器片２を検出した。築造時期は不明である。

8.　第10号墳

第９号墳に接して，その南に立地する。第９号墳とほぼ同様の形状を呈していることから，同巧同大のものと推定される。

内部主体は，尾根主軸に直交して，地山を掘り込んだ土壙１である。隅丸の長方形で，長さ214cm，巾130cm，深さ43cmである。床面に円礫を敷いている。副葬品として，管玉１およびガラス小玉１を検出したが，築造年代は不明である。

9.　第11号墳

（立　地）

第４号墳から分岐して北にのびる丘陵尾根上に立地する。尾根稜線から西の斜面は切り開かれて，果樹園となっていたため，墳丘の西半は削平されていた。

（外　形）

１辺９m×13mの長方形プランを有する方墳である。地山を利用して構築されており，尾根部を約１mも溝状に掘りさげて，墳丘を整形している。盛り土は現状で約50～60cm認められたが，かなりの流失が予想される（図11）。

外部施設は，溝状墳端底にハニワ片が，散乱して検出されたことから，朝顔形ハニワを含む円筒

ハニワの囲繞が想定される。調査の結果原状を保つ基底部は発見できなかったが，検出ハニワ片の量から推定して，その囲繞間かくは，密ではなかったと考えられる。葺石は認められないが，ハニワ片の間から須恵器片若干が検出された。

（埋葬施設）

墳頂部に1および東墳端部斜面に1の2主体が発見された。

第1主体は，墳頂中央部に尾根に直交して位置する。盛り土中に床面ベースを有し，まわりを帯状に粘土でまいていた。長方形プランをもつ，長さ176cm，巾47cmを測る。主体東端棺外に鉄鎌を含む小鉄器片6点が一括しておかれていた。

第2主体は，墳丘東斜面墳端部に地山を掘り込んで造られた土壙である。掘り方プランは楕円形で，長さ102cm，巾66cm，深さ地山上表から135cmを測る。深さ135cmは本古墳群土壙中最も深いものである。

（時　期）

本古墳の築成年代は，ハニワの間から検出した須恵器片及び鉄器の特徴から，5世紀後半と推定される。

10. 第12号墳

（立　地）

第4号墳の墳端に接して，その東側に立地する方墳である。南北10m×東西16mを測る。第4号墳との比高は約9mあり，その流土によって，西墳斜面を埋められ，調査当初は，第4号墳に付帯する，造り出し状部の感を呈していたが，発掘によって，独立した古墳であることがわかった。

墳丘は自然地形をそのまま利用して築成されている。すなわち，丘陵尾根部にあたる東西墳端部は，地山を溝状に深く掘りさげ，方形プランの1辺を造りだし，両側を直線上に削り整形したものである。したがって墳丘は現状では全く盛土を有さないが，単に流失したとするよりも，もともとそうした構築法をとったものと推定される。

外部施設として，地山を掘りおろした東西の尾根部墳端に，葺石を葺いて墳域を画している。ハニワは有しないが，葺石間に一括土器，および墳頂主体直上から土師器片が遊離して検出された。

（埋葬施設）

墳頂中央部に長さ320cm，巾210cm，深さ30cmの長方形の土壙墓が位置している。東南隅に枕石1対があり，その上に頭骸骨が遺存していた他，脚骨が2箇所から検出された。その遺体の出土箇所および土壙の大きさから複数埋葬が推察される。

副葬遺物は枕石に接して槍先1点が発見された他は，なにも認められなかった。また本主体掘り方内には多数の児頭大の石材が不規則に存在したが，その有つ意義については不明である。

（時　期）

葺石間から出土した一括土器は，本古墳と同時性をもつものである。この土器は口縁形の特徴から，王泊六層の時期に比定できるものである。したがって本古墳の年代は，用木古墳群中第2号墳

に次ぐものと推考する。

11. 第 13 号 墳

第４号墳から第５号墳にかけて，丘陵稜線にトレンチを設営して発掘した結果，その中間から，地山を掘り込んで造られた土壙１基を検出した。現状では封土を全く有たないで単独に構築されているため，一応第13号墳として，取り扱った。

土壙は，不整形な楕円形を示し長さ169cm，平均巾79cm，深さ58cmを測る。枕石および伴出遺物共になく，年代も不明である。

12. 第 14 号 墳

第８号墳の南に立地する。トレンチ発掘によって土壙を検出したことから発見された。封土は現状では認められず，墳形も定められない。内部主体である土壙は尾根稜線と直交して３基がつくられている。

第１主体の長さ211cm，巾134cm，深さ44cm，第２主体の長さ139cm，巾88cm，深さ41cm，第３主体の長さ224cm，巾97cm，深さ42cmを測り，いずれも掘り方プランは長楕円形を呈する。

伴出遺物は第１主体内から土器片が数片検出された他はなにも認められない。したがって，年代についても現段階では不明である。

第5章 ま と め

(1) 用木古墳群は，１つの丘陵尾根上に古墳成立期前後の墳墓がグループをなして築かれている。そのうち，第１号墳から第６号墳にかけて直列状に立地する古墳は，その規模・形状から推して，本団地造成地内発見の７支群60基中の，主墳系列である。

(2) 今回発掘調査した12基の古墳は，いずれも埋葬施設に石室を用いていない。地山に直接土壙を掘っているか，あるいは粘土床上に埋葬する方法によるものが多い。とくに第４号墳に代表されるように，墳頂の中心主体の他に，墳端から墳外尾根上にかけて，多数の埋葬施設をもつものが多い。同一古墳の内部主体として，これらをとりこめば，あたかも前方部的形状を呈する。

(3) 墳丘の築成にあたって，第２号墳および第４号墳に代表されるように，地山の自然地形を利用整形したのみのものがある。それらは封土をまったくもたず，墳形および墳域が定形化していない。

(4) 調査前の外表観察で円墳と判断されたもののうち，発掘調査によって，方墳であることが判明したものがかなりある。これらは，墳域を画する周湟状の溝および，葺石・ハニワの出土状態等から確認された。

(5) 墳外表に土器片が多く検出された。これらは，内部主体直上および墳端葺石間よりとくに集中して出土する。被葬者埋葬に伴なう葬送儀礼および古墳築成年代を知るうえの資料となるもので

ある。

(6) 第１号墳第１主体出土の尚方作銘の獣帯鏡をはじめ，第２号墳の斜行櫛歯文帯方格規矩鏡・同内行花文鏡，第３号墳の仿製波文帯四獣鏡等，特色のある銅製品を出土している。

(7) 第１号墳墳丘下で発見した竪穴住居址は，標高90m，眼下の冲積平地との比高約70mの丘陵尾根にあたり，いわゆる高地性集落の範疇にはいるものである。住居址は弥生後期の土器を伴出し，床面から多数のサヌカイト石屑に混じて，石鏃を検出した。このことから石器の製作をもあわせおこなっていた住居であると判断された。

同地周辺の丘陵上には弥生期の土器が散布し，さらに南にのびる尾根上に竪穴住居址群（Ｙ７遺跡）が発見されている。したがって同地は発掘調査した古墳の他に，弥生遺跡として再調査を行なう必要がある。

(8) 用木古墳群の発掘に引き続いて行なった，便木山10号墓群（土壙41，甕棺６の弥生墳墓），および四辻墳墓群（古墳１基及び土壙64主体）はいずれも，弥生期の墓群で，本古墳群に先行する。また一方において，近傍の巨墳両宮山古墳に比すればその先駆的位置を占める。

(9) 以上のことがらから総合して，本古墳群は，古墳の発生から発展への問題，換言すれば，吉備の国における前期古墳の出現と展開の歴史的過程を一つの地域内において一貫してとらえ得る遺跡群の一部を構成するものである。

（1971.3.25.　文責　神原英朗）

（付表１）　山陽住宅団地内埋蔵文化財一覧

古墳群	名称	墳形	径（m）	高（m）	保存度	取扱区分 保存	取扱区分 調査	マスタープランとの関係	備考
用木古墳群	A－1	円墳	31.0	5.0	○		○	中心施設	葺石
	2	〃	(22)	(3.0)	○		○	〃	
	3	前方後方	43.0	4.0	○		○	小学校	葺石
	4	方墳	(25.0)	(4.0)	○		○	〃	
	5	〃	12.0	0.8	○		○	〃	葺石
	6	前方後円	37.0	4.0	○	○		児童公園	或は円墳２
	7	〃	24.0	1.2	○		○	幼稚園	
	8	円墳	14.0	1.2	○		○	小学校	
	9	?	(6.0)	?	△		○	〃	
	10	?	(6.0)	?	△		○	〃	
	11	方墳	12.0	1.5	△		○	〃	ハニワ
	12	〃	16.0	1.5	○		○	〃	葺石
	13	?	?	?	△		○	〃	
	14	?	?	?	△		○	〃	
	15	円墳	15.0	1.5	○		○	?	
	16	〃	13.0	1.5	○		○	?	
宮山古墳群	B－1	円墳	17.0	2.3	△	○		緑地	
	2	〃	15.0	1.0	○	○		〃	
	3	〃	12.0	0.8	○	○		〃	
	4	〃	15.0	1.5	△		○	〃	
野山古墳群	C－1	円墳	11.0	1.2	○	○		近隣公園	
	2	〃	12.0	1.0	○	○		〃	
	3	〃	6.0	0.5	○	○		〃	
	4	〃	?	?	×	○	○	〃	シスト
	5	〃	?	?	×	○	○	〃	シスト
	6	〃	?	?	×	○	○	〃	シスト
	7	〃	6.0	0.5	○	○		〃	
	8	〃	6.0	0.8	○	○		〃	
	9	〃	13.0	0.8	○	○		〃	
	10	〃	12.5	0.8	○	○		〃	
	11	〃	10.0	0.8	○	○		〃	
	12	〃	19.0	2.0	○	○		〃	
愛宕山古墳群	D－1	台状墓	48.0	1.0	○		○	建売分譲	弥生かも？
	2	円墳	13.0	0.8	○		○	〃	
	3	〃	(10.0)	(0.5)	○		○	〃	

S 46.3.31現在

古墳群	名称	墳形	径 (m)	高 (m)	保存度	取扱区分 保存	取扱区分 調査	マスタープランとの関係	備考
岩田古墳群	E—1	円墳	17.0	2.0	×		○	建売分譲	
	2	〃	16.0	1.0	×	○		児童公園	
	3	方墳	18.0	1.5	×		○	?	ハニワ，葺石
	4	円墳	12.5	1.5	△	○		緑地	
	5	方墳	13.0	1.5	○		○	道路	葺石，竪穴石室
四辻古墳群	F—1	円墳	16.0	2.0	○		○	分譲宅地	
	2	〃	7.0	1.2	×		○	〃	
	3	〃	13.0	2.0	×		○	〃	組合石棺
	4	〃	7.0	1.0	×		○	〃	弥生墳墓複合（土壙墓群）
	5	〃	13.0	0.8	○		○	〃	
	6	〃	8.5	1.0	○		○	〃	
	7	〃	14.0	1.5	○		○	〃	
	8	〃	15.0	1.2	○		○	〃	
	9	〃	15.0	1.2	○		○	〃	
便木山古墳群	G—1	円墳	9.5	1.0	○	○		児童公園	
	2	〃	15.0	1.5	○	○		〃	
	3	〃	16.0	2.0	○	○		〃	組合石棺
	4	〃	8.0	0.8	○	○		集合住宅	
	5	〃	12.0	1.0	○	○		〃	
	6	〃	8.4	0.8	○	○		〃	
	7	〃	12.0	2.0	△	○		〃	ハニワ
	8	前方後円	16.0	1.0	○	○		〃	
	9	円墳	11.0	0.8	△	○		〃	
	10	〃	13.0	1.2	○		○	道路	弥生土壙墓41
	11	〃	?	?	×		×	?	横穴式石室

遺跡	立地	備考
Y—1	丘陵端	弥生集落址
2	〃	弥生～古墳時代集落址（竪穴住居址）
3	舌状丘陵・谷	同上
4	丘陵谷頭	弥生包含層，弥生土器散布
5	丘陵斜面	弥生墓地？
6	丘陵尾根	同上
7	〃	弥生集落址（竪穴住居址検出）

（付表２）　用木古墳群内部主体一覧表

古墳	主体	主体主別	立地	掘り方形状	掘り方上層計測値 長さ	巾	深さ（現地表）	深さ（掘り込み）
A 1	1	割竹型木棺	墳頂中央部	隅丸長方形	645	255	70	—
	2	土壙	墳端部	長楕円形	220	89	—	(20)
	3	土壙	墳外尾根	長楕円形	216	60	308	14.8
	4	土壙	墳丘直下地山	不整形	450	265	—	26
	5	土壙	墳端部	不整形	340	188	—	59
	6	合口甕棺	墳外斜面	?	?	?	25	—
A 2	1	平底組合木棺	墳頂中央部	長方形	368	172	107	87
	2	土壙	墳斜面	不整形	351	165	55	27
	3	土壙	墳端部	不整形	420	207	—	57
	4	甕棺	墳斜面	楕円形	59.8	52.7	27.8	15
	5	土壙	墳端部	隅丸長方形	227	123	43	22
	6	土器棺	墳外尾根	楕円(複合?)	93	75	53.6	31.2
	7	甕棺	墳外尾根	隅丸長方形	(40)	(30)	—	15
	8	土壙	墳外尾根	隅丸長方形	127	90	18	11
	9	土壙	墳斜面	不整形	189	99	26	—
A 3	1	木棺結土槨	墳頂中央	隅丸長方形	570	232	177	90
	2	土壙	造出状部	長方形	370	179	99	68
	3	土壙	墳端部	不整形	194	73	49	30
A 4	1	土壙	墳頂部	長方形	363	157	108	92
	2	土壙	墳頂部	長方形	306	118	75	34
	3	土壙?	墳端部	溝状	565	85	—	15
	4	土壙	墳外尾根	長方形	326	167	—	103
	5	土壙	墳外尾根	長方形	289	114	—	27
	6	土壙	墳外尾根	楕円形	140	79	—	20
	7	土壙	墳外尾根	長方形	141	87	—	42
	8	土壙	墳端部	不整形	234	40	—	32
	9	土壙	墳端部	長方形	261	89	—	23
	10	土壙	墳端部	長方形	248	97	—	18
	11	土壙	墳外尾根	長楕円形	260	115	40	27
	12	土壙	墳外尾根	隅丸長方形	267	128	28	16
	13	土壙	墳外尾根	不整形	190	90	59	35
	14	土壙	墳頂肩部	隅丸長方形	(180)	73	—	20
					90	56	—	42
	15	甕棺	墳外尾根	円形	?	?	?	—

（単位cm）

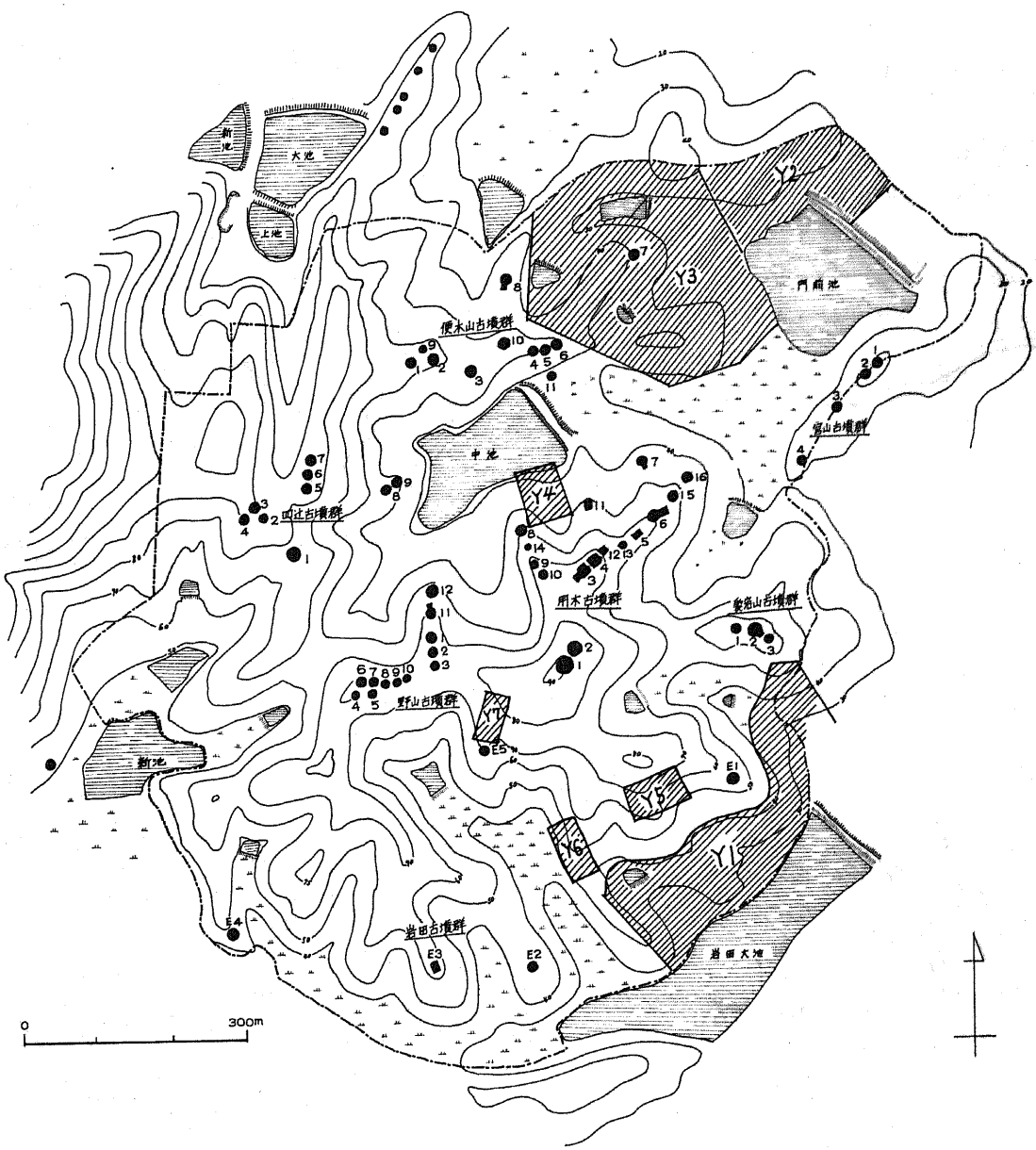
主体床面計測値			遺物その他
長さ	巾	深さ	
475	76	18	尚方作獣帯鏡 1　銅鏃 37 直刀 1　剣（槍？） 3 鉄斧 2　鉇 1 床面に朱，※主体計測値は棺土層計測値
182	40	—	枕石１対
162	54	—	円礫床
420	240	—	地山岩盤掘り抜き，古墳築成に先行
240	153	—	土壙埋土に葺石材落ち込み
—	—	—	土師器甕
259	84	32	方格規矩鏡，床面に朱，※主体計測値は棺外法
(310)	(140)	—	地山岩盤掘り抜き
360	182	—	地山岩盤掘り抜き，内行花紋鏡
—	—	—	弥生後期
151	100	—	鉄器小片１
—	—	—	土器片利用の箱形組み合せの身部に蓋
—	—	—	—
111	74	—	ガラス小玉１
(112)	80	—	地山岩盤掘り抜き
470	52	(35)	仿製四獣鏡１　鉄斧３　鉇１ 枕石１対　床面に朱
330	139	—	鉄斧１を含む小鉄器８ 枕石西小口に各１対
183	60	—	枕石１対
242	90	—	枕石２対（並列）
269	60	—	小鉄器片２　枕石１対
478	(47)	—	遊離一括土器片（器台片，高坏片）列石（159cm）
268	102	—	人骨（４体）管玉１，剣（槍？）１，刀子１，枕石３対
270	72	—	人骨（３体）剣（槍？）２，刀子１，ガラス玉２，枕石３対
117	61	—	枕石１対
130	60	—	—
(220)	(30)	—	—
(220)	(57)	—	—
219	55	—	—
189	55	—	人骨１体，枕石１対，マガ玉２，ガラス玉１，小玉１，管玉８
243	61	—	枕石１対
171	70	—	—
(140)	65	—	T字状２重掘り方複数埋葬か？
79	32	—	
—	—	—	直立合せ口

古　墳	主　体	主体種別	立　地	掘り方形状	掘り方上層計測値			
					長　さ	巾	深　さ（現地表）	深さ（掘り込み）
A5	1	木棺直葬	墳頂部	長方形	—	—	—	—
	2	木棺直葬	墳頂部	長方形	—	—	—	—
	3	土　壙	墳端部	隅丸長方形	185	61	40	15
A8	1	粘土床	墳頂部	?	—	—	—	—
	2-1	土　壙	墳裾部	長楕円形	261	82	—	18
	2-2	土　壙	墳裾部	楕円形	181	97	—	24
	3-1	土　壙	墳裾部	不整形	315	189	—	25
	3-2	土　壙	墳裾部	不整形	103	73	—	20
	4	土　壙	墳外斜面	長方形	165	70	—	(32)
				長方形	235	60	—	74
A9	1	土　壙	墳頂部？	長方形	364	155	54	35
	2	土　壙	墳頂部？	長方形	256	133	65	38
A10	1	土　壙	墳頂部？	長方形	214	130	43	19
A11	1	粘土床	墳頂中央部	長方形	176	47	58	30
	2	土　壙	墳斜面	楕円形	102	66	220	135
A12	1	土　壙	墳頂部	長方形	(320)	(210)	(30)	(15)
A13	1	土　壙	（不　明）	不整形	169	79	58	36
A14	1	土　壙	（不　明）	不整形	211	134	44	29
	2	土　壙	（不　明）	不整形	139	88	41	26
	3	土　壙	（不　明）	不整形	224	97	42	25

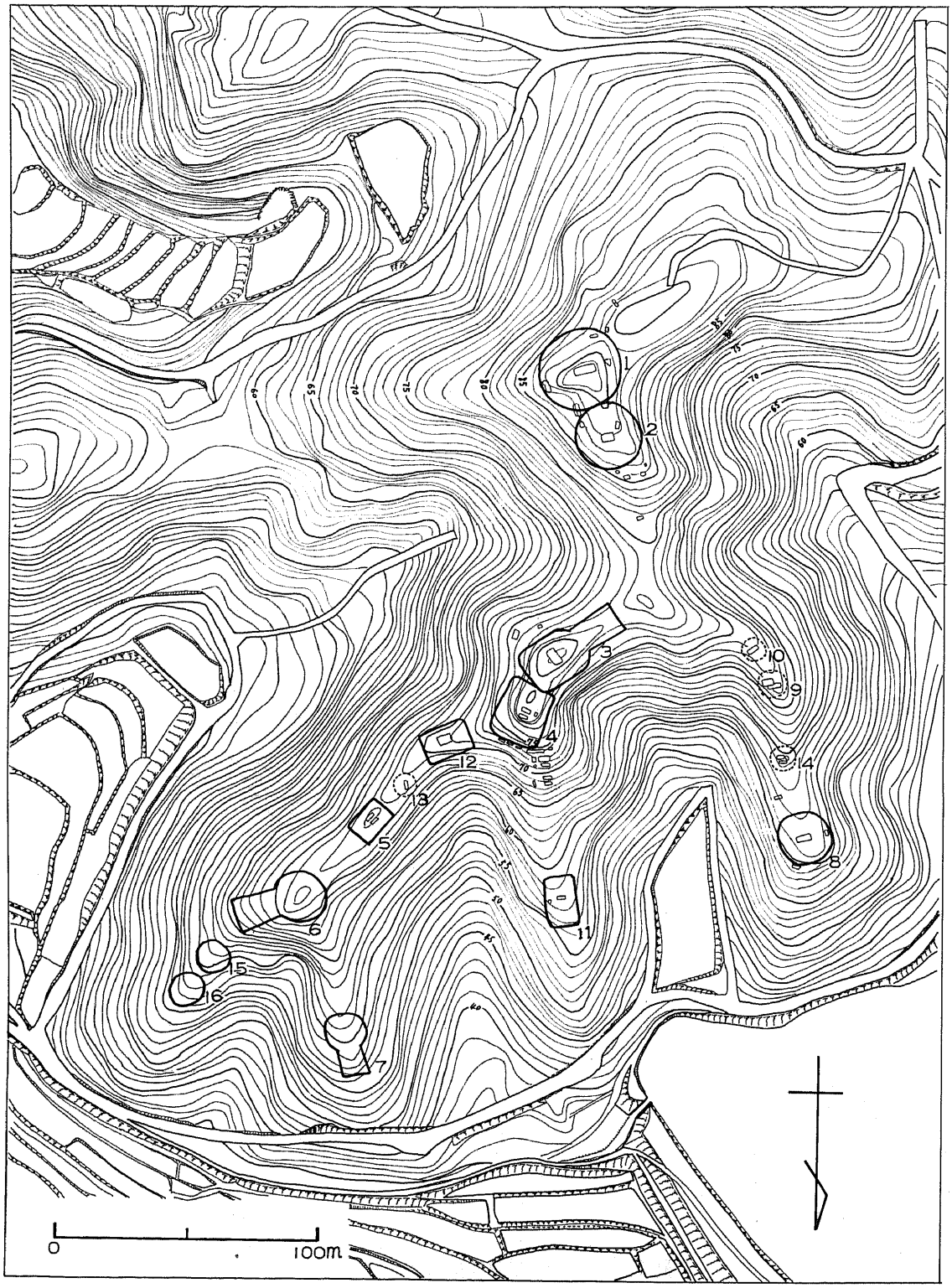
※　上表計測値は，長さは最長部，巾，深さはほぼ中央部の平均的値を示す。今後の整理作業の進行によっては若干修正することがある。

※　表中—の部分の数値は，実測図の検討が不十分のため，記載できないものを含む。また（　）内の数値は推定値である。

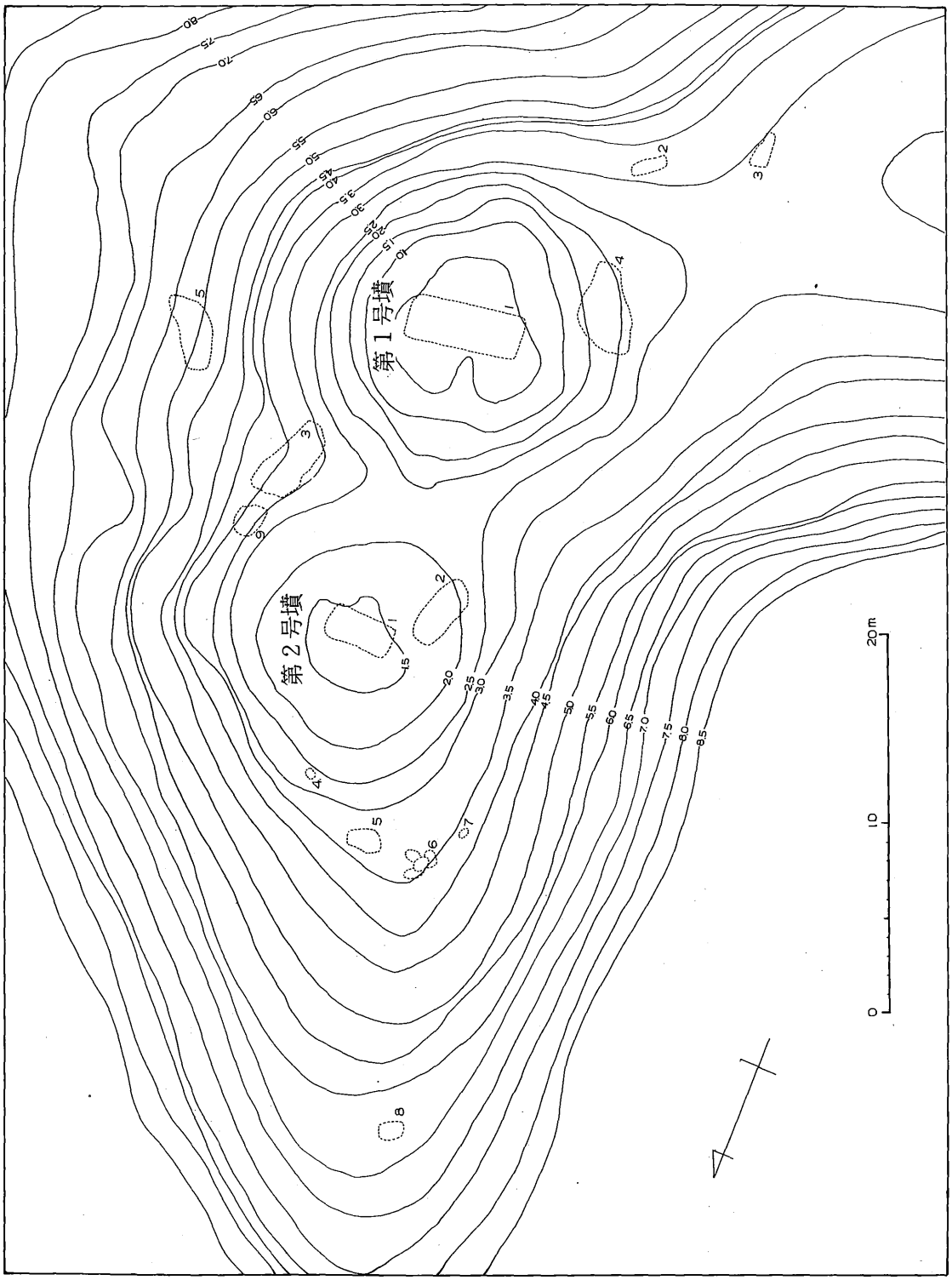
主体床面計測値			遺物その他
長さ	巾	深さ	
235	85	25	ガラスマガ玉1，ガラス小玉6，槍（剣？）1枕石1対，床面に朱，盛土中に床面
235	78	25	ガラスマガ玉1，管玉1，ガラス小玉19，鉇1枕石1対，床面に朱，盛土中に床面
176	47	—	—
419	118	—	鉄鏃1を含む鉄器5点，枕石1対床面に朱盛土中に床面
183	35	—	土壙直上に土師片
141	(40)	—	—
(300)	(150)	—	—
(80)	(50)	—	—
151	60	—	T字形に切り合い，複合か？
191	35	—	
334	113	—	—
220	94	—	礫床，人骨（1体）ガラス玉1，鉄鏃2
195	81	—	礫床，管玉1，ガラス玉1
170	40	—	棺外に鏃，刀子等6点，盛土中に床面
95	57	—	—
302	185	—	人骨（2体以上），石材多し　槍先1，枕石1対，朱のひろがり有
144	37	—	尾根肩斜面墳丘なし
144	84	—	尾根部墳丘なし
113	56	—	同上
121	(45)	—	同上



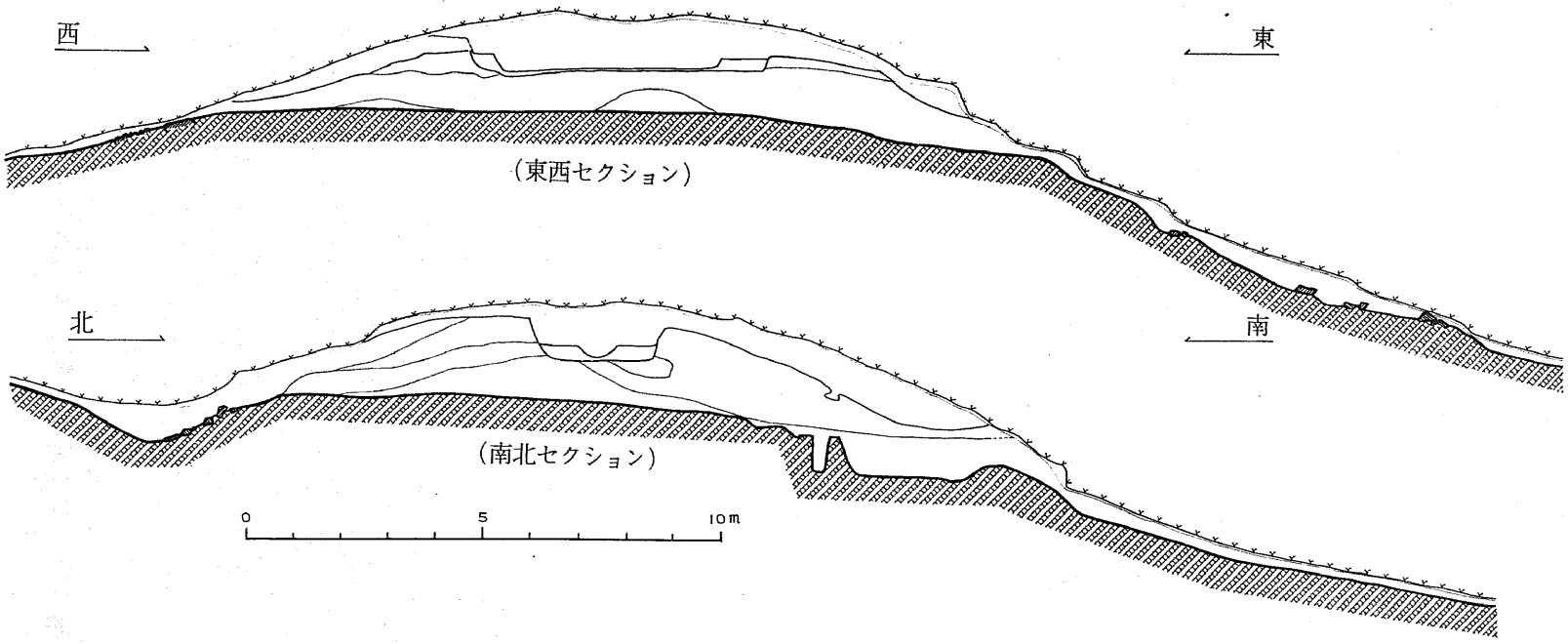
第１図　山陽住宅団地内遺跡分布図



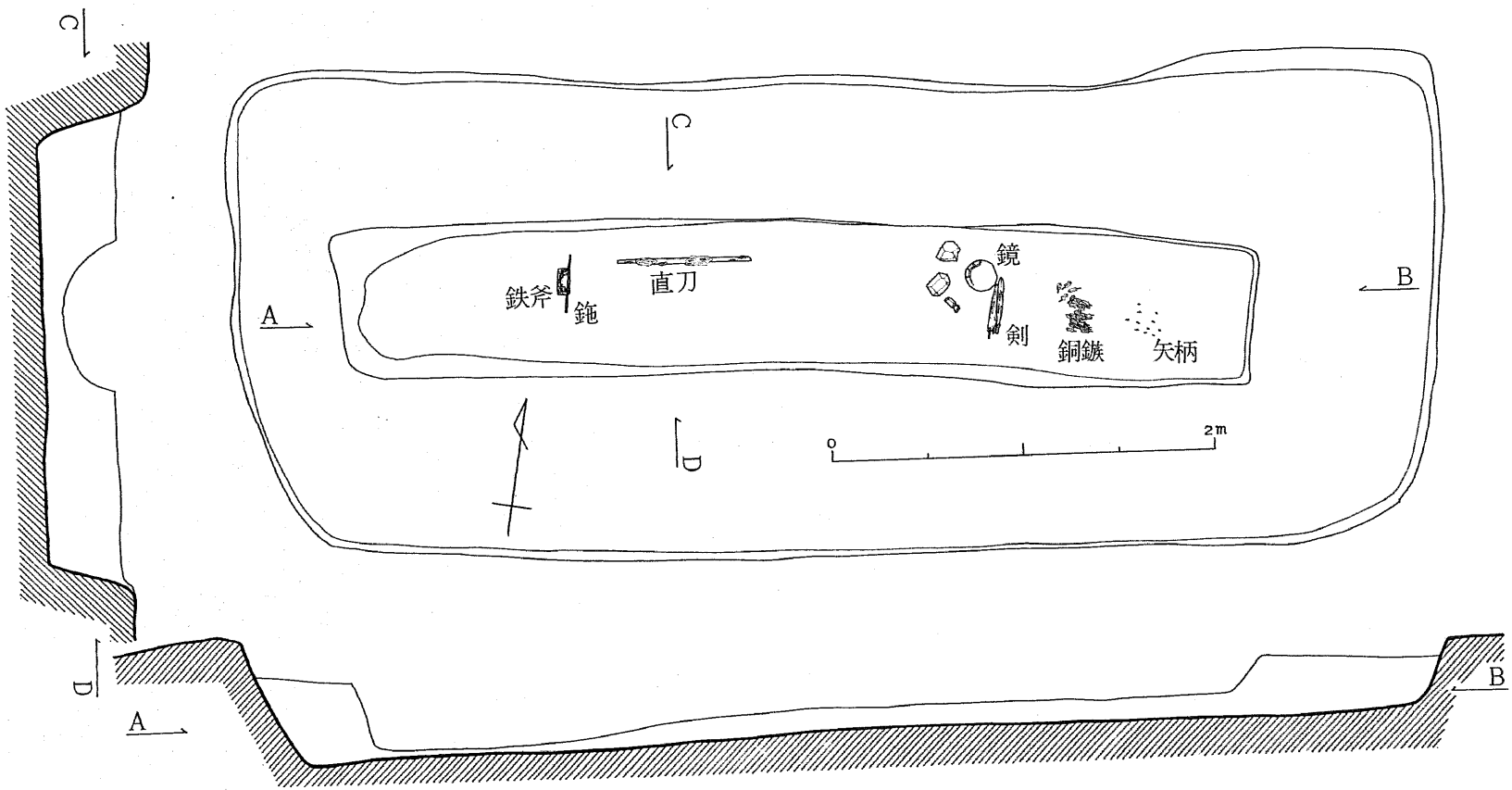
第２図　用木古蹟群立地図



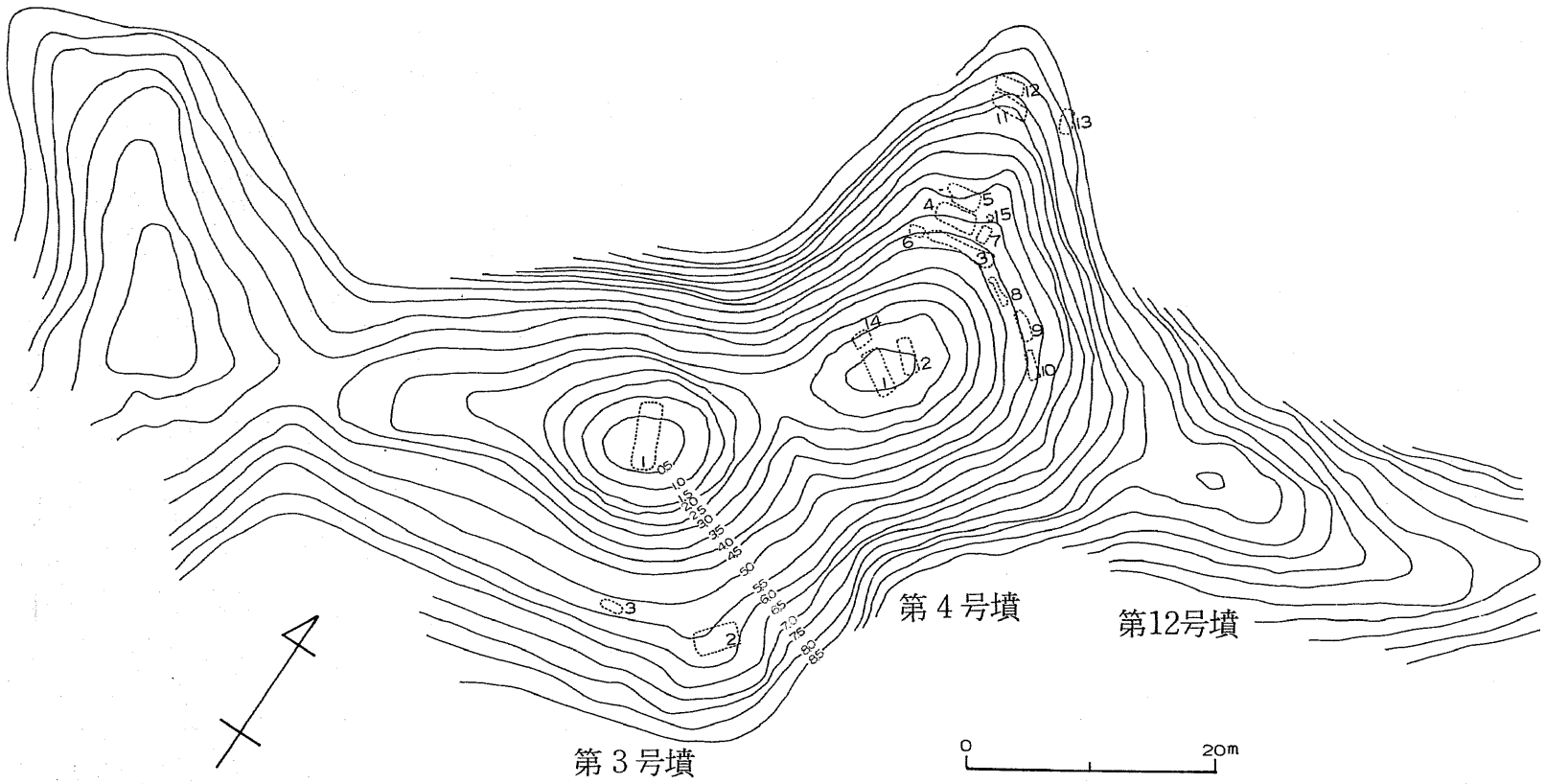
第3図　第1号墳・第2号墳外形図



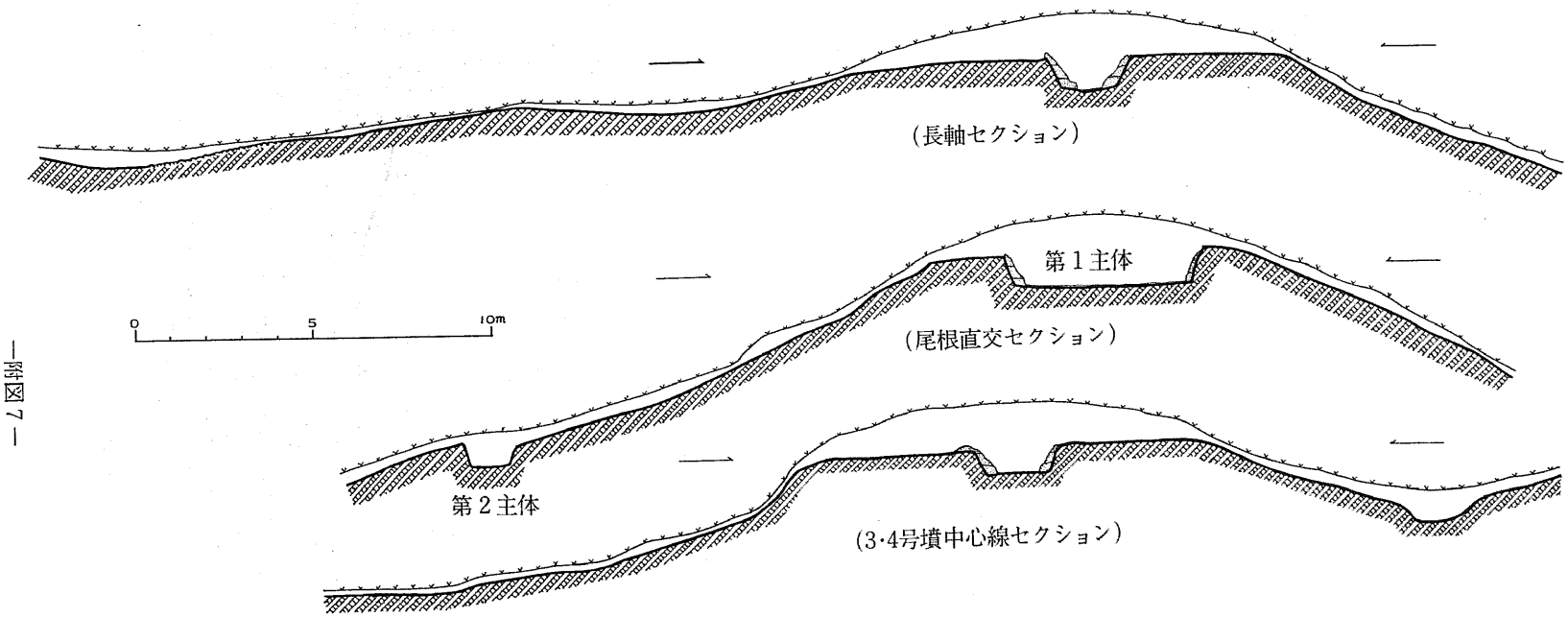
第4図　第1号墳墳丘断面図



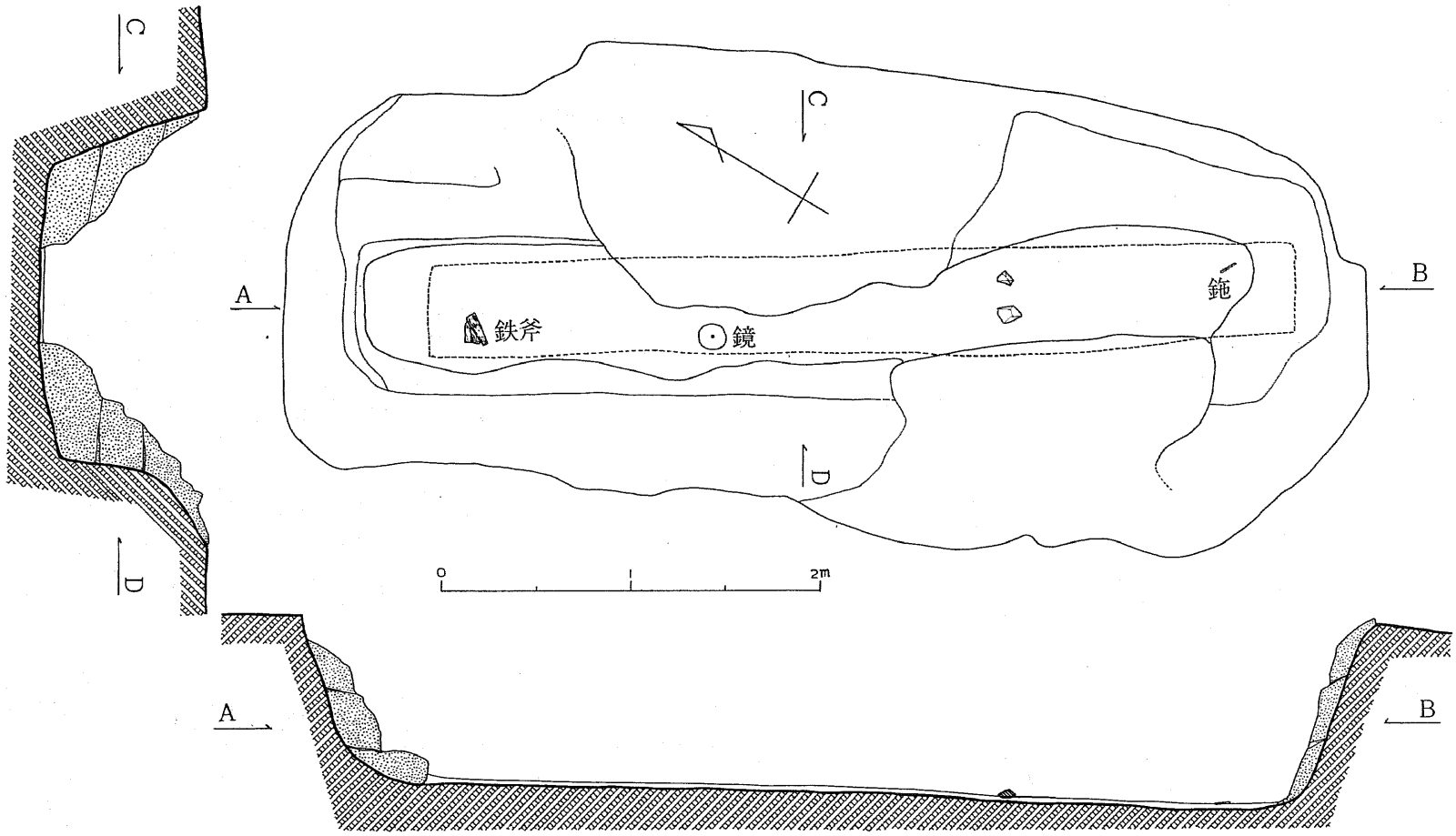
第5図　第1号墳第1主体図



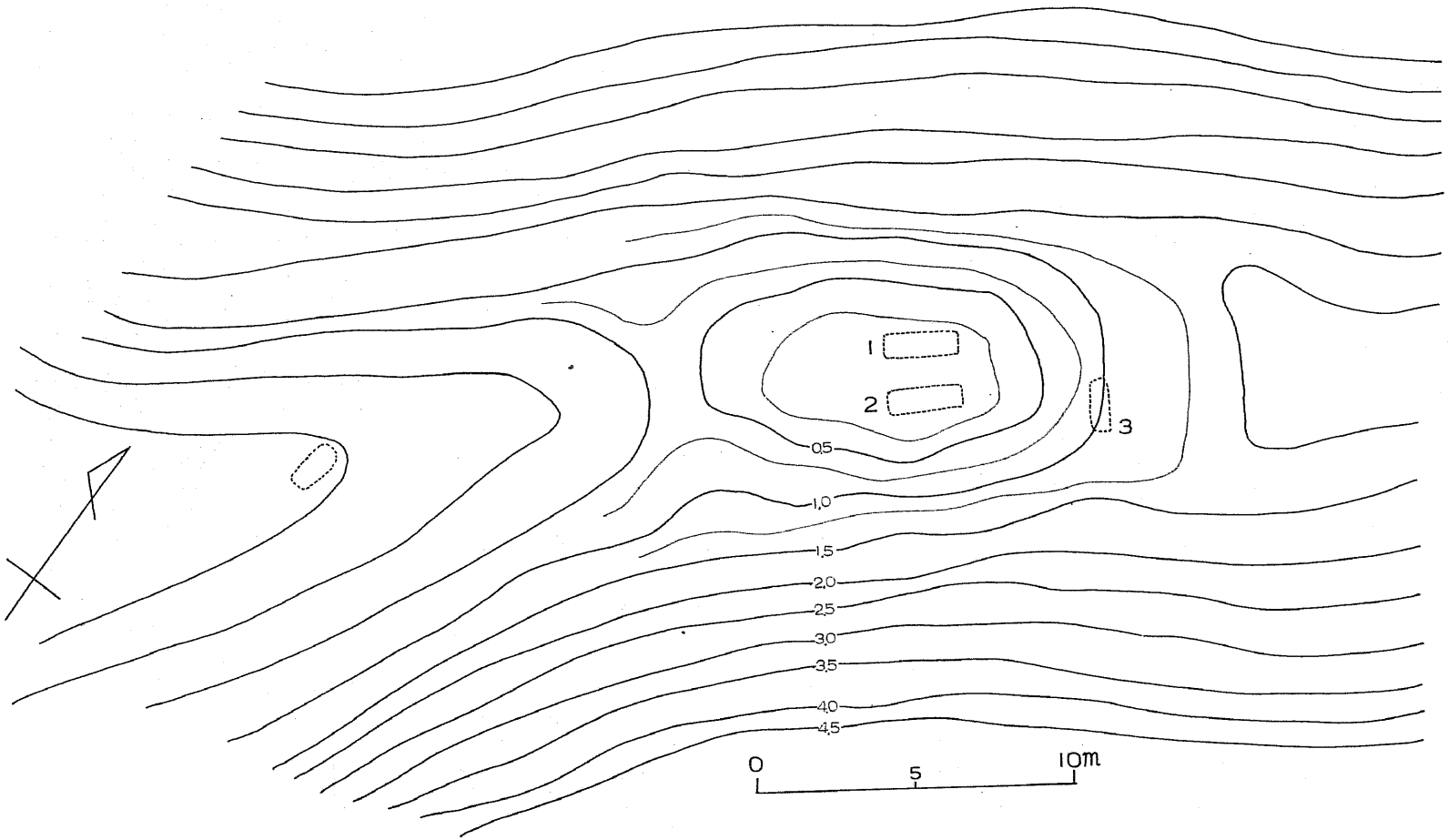
第６図　第３・４・12号墳外形図



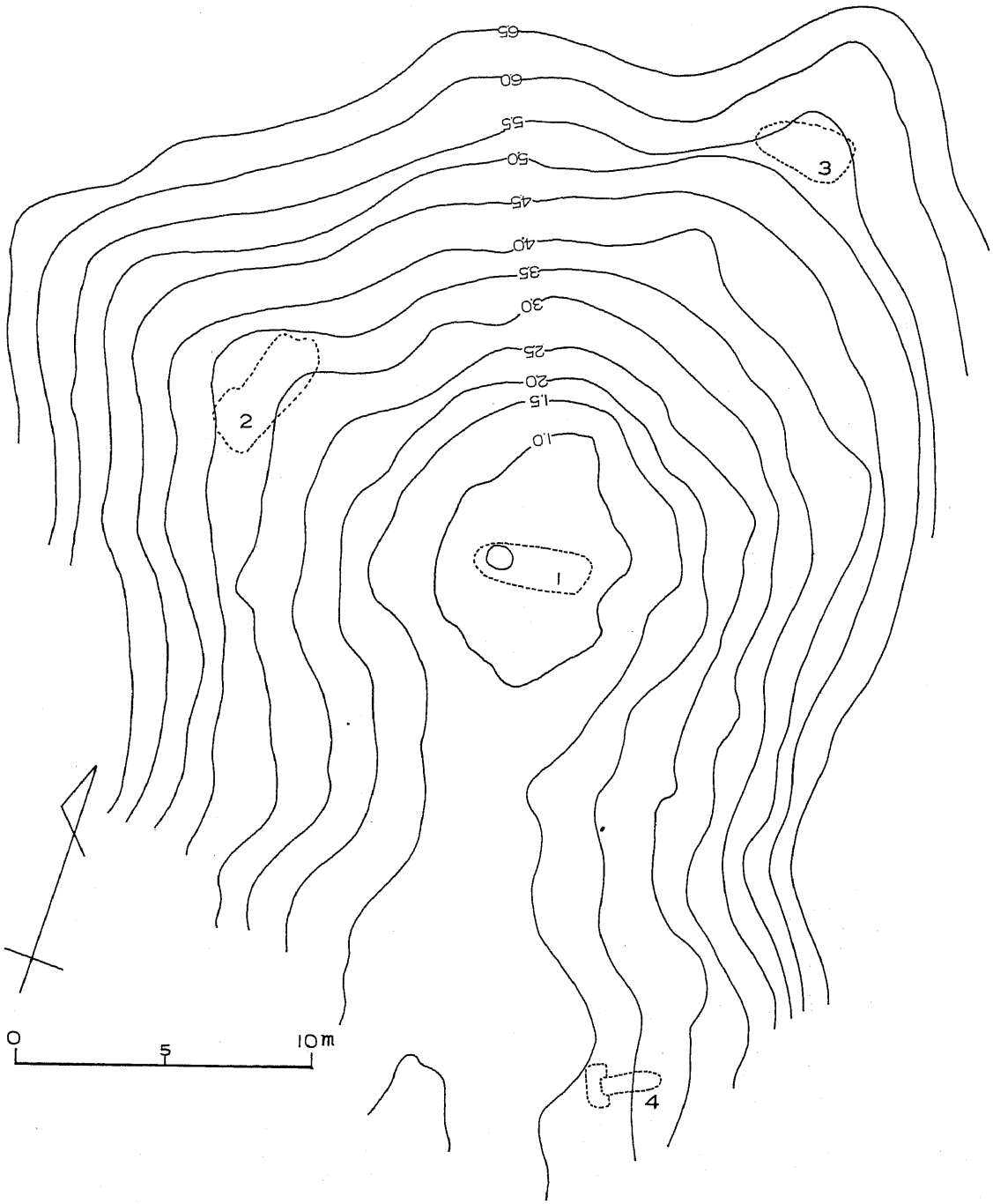
第7図　第3号墳墳丘断面図



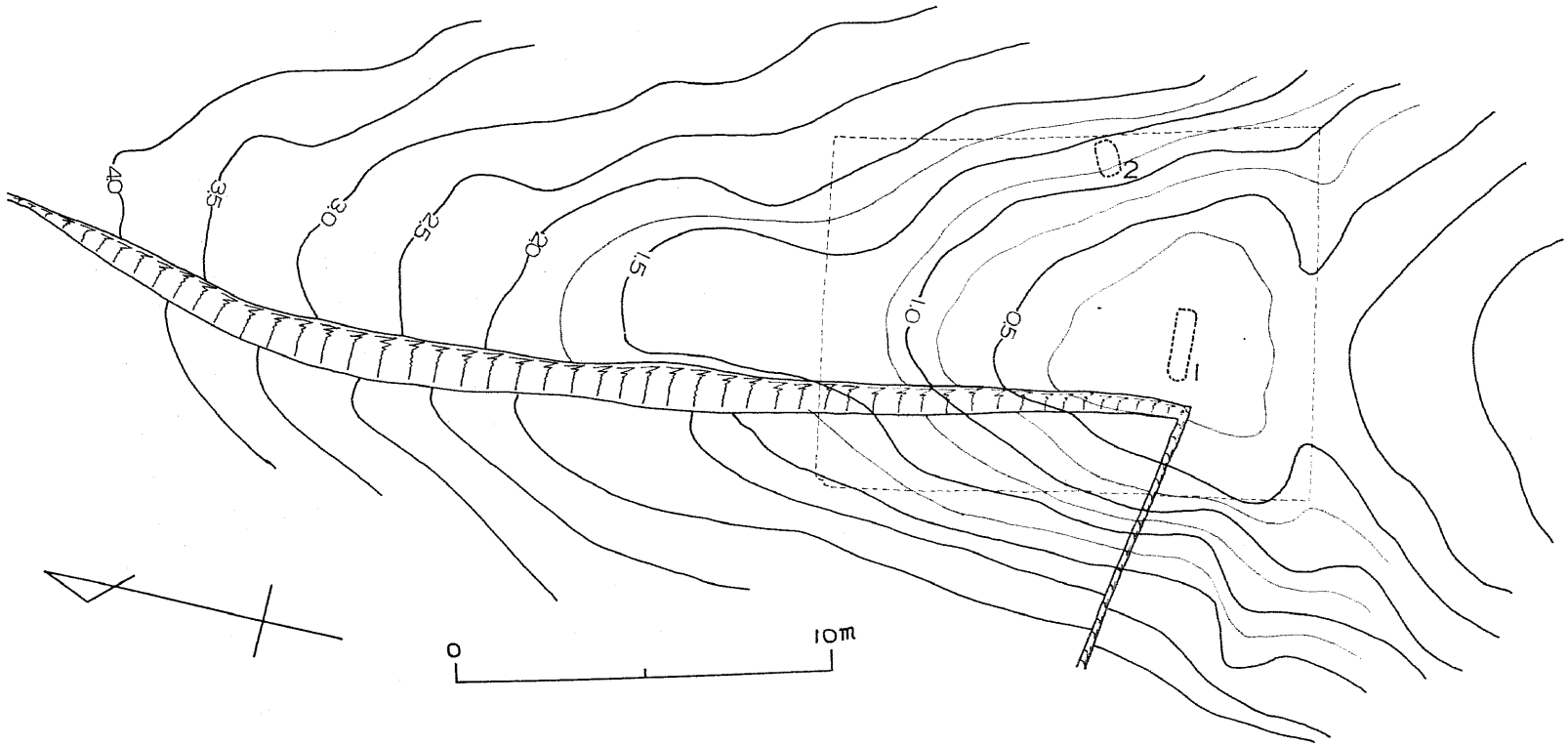
第8図　第3号墳第1主体（粘土槨）図



第9図　第5号墳外形図



第10図　第８号墳外形図



第11図　第11号墳外形図